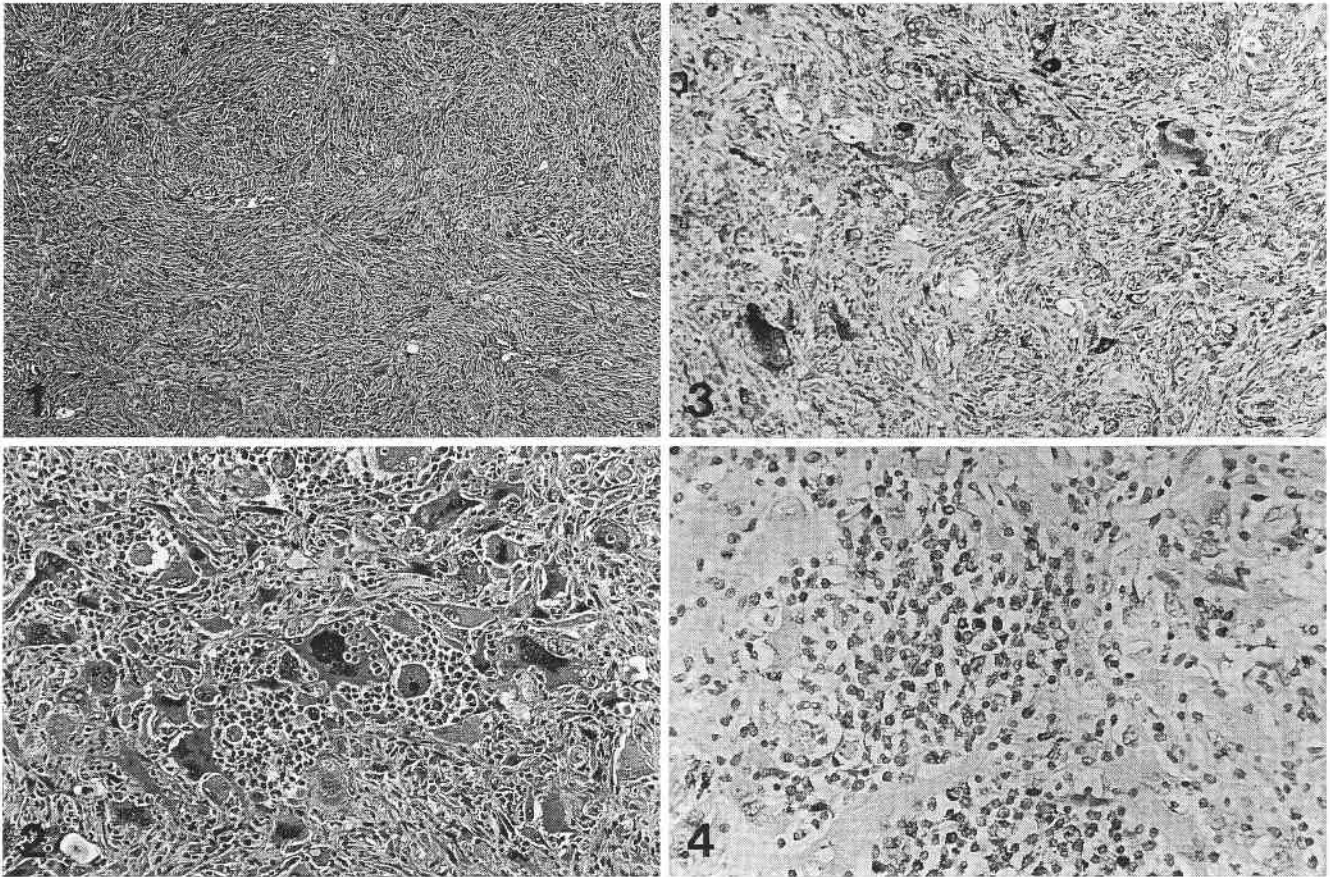


ラットの腸間膜腫瘍

(財) 食品農医薬品安全性評価センター提出 第 39 回獣医病理研修会標本 No. 757



動物：ラット，F344/DuCrj，雄，109 週齢。
 剖検所見：104 週計画解剖時に本腫瘍が発見された。腸間膜部に 63×63×40 mm の灰白色，密実，多結節状の結節として観察され，腸間膜リンパ節を巻き込み小腸壁と癒着していた。割面はやや膨隆，赤色および白色の小斑点が散発的に観察された。
 組織学的所見：本腫瘍は 3 種類の細胞から構成されていた。即ち，大型異型の単核～多核の巨細胞，線維芽細胞様の紡錘形細胞，小型円形の組織球様細胞が種々の程度に混在していた (写真 1, HE)。組織球様細胞と巨細胞が優位な部位ではそれらの細胞が敷石状に配列し (写真 2, HE)，線維芽細胞様細胞が優位な部位では束状に集簇し車軸様構造や striform pattern を呈していた。マッソントリクローム染色では種々の程度の膠原線維が観察され，鍍銀染色では 1～数個の腫瘍細胞を取り囲むかのように好銀性線維が観察された。一方，PTAH 染色では横紋構造は観察されず，Oil 赤 O 染色では腫瘍細胞内に陽性顆粒 (脂肪滴) は観察されなかった。免疫染色では，ビメンチン (写真 3)，ED-1 (写真 4) に陽性を示し，筋系マーカー (デスミン，ミオグロ

ビン， α アクチン)，神経系マーカー (NSE, S-100) は陰性を示した。電顕観察では，巨細胞，細胞質に microfilament を持つ線維芽細胞様細胞，細胞質内にライソゾームと良く発達した Golgi 装置を持つ組織球様細胞，核/細胞質比が高く，細胞質内小器官の発達の乏しい未分化細胞が観察された。
 考察：以上の結果より，本腫瘍は Weiss らのヒト MFH の診断基準を満たしていた。MFH は，その起源を多分化能を有する未分化間葉細胞と考えられているため，その組織像は同一腫瘍内でも部位により極めて多彩といわれている。本例は，腫瘍組織全般に多彩性に乏しい点の特異で，線維芽細胞と組織球への分化しか示さない典型的な症例と考えられた。鑑別診断として，多形性を示す脂肪肉腫は腫瘍細胞内に微細小滴や Oil 赤 O 染色により脂肪滴が証明されないことから否定され，神経系腫瘍は NSE, S-100 に陰性であり，また筋系腫瘍もデスミン，ミオグロビン， α アクチンに陰性で，組織あるいは電顕にて筋原線維が証明されないことから否定された。
 組織診断：悪性線維性組織球腫